
サヤとカグヤとマリアンヌ

山田はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヤとカグヤとマリアンヌ

【Zコード】

Z0778X

【作者名】

山田はな

【あらすじ】

「殺したい程憎い相手がいる世界を救えますか」
「自分さえも救えない者が世界を救えますか」
「世界を持たない者に世界を救わせますか」
三人の少女達が、世界の救世主への階段を一つ一つ登つて行く物語。

プロローグ～昔々の物語～

昔々、たつた一人で世界を造つた神様がいました。

太陽を造り朝を、月と星を造り夜を、大地を造り水を流しました。
春に喜びを、夏に愛を、秋に希望を、冬に安らぎを。
一時も休むことなく神様は世界を造り続けました。

最後に命を生み出し世界が鼓動を始めるど、神様はようやく手を休めて笑いました。

これでようやく眠る事が出来ると。

疲れた体を癒すため神様はゆっくり目を閉じました。

そこで始めて神様は気が付いたのです。

長い長い間、ずっと休まず世界を造り続けていた神様はすっかり眠り方を忘れてしまつっていた事に。

夜を招き、目を閉じ、温かな布団に入つても眠ることが出来ません。
世界をたつた一人で造つた神様はとても疲れていました。
でも眠り方が思い出せません。

神様は考えました。

どうすれば眠りにつくことが出来るか？

考えて、考えて、考えて、

神様は眠りにつくため、自らが造つた世界の中から三人の賢者を呼びました。

呼ばれた賢者達は神様のため

一人目は歌を唄い。

二人目は手を握りました。

そして最後の一人は、神様にそつと優しいキスを贈りました。

神様は三人の賢者に感謝し、ようやく眠りを手に入れる事が出来ました。

「ありがとう。私の愛しい子供達」

どうか永遠の祝福があらんことを

『祝福の創世記』より

第一話～再会は突然に～

『聖救世主学園』
セイントメシア

どの国にも属さない独立融資組織が運営する、未来の救世主候補生達を育成する教育機関。

「智」、「信」、「仁」、「勇」、「厳」の教育理念の下、あらゆる技術と最高の英知が集まる場所。

『聖救世主学園』仰々しい名前はけして飾りじゃない。

正式な記録として、創設から現在までの間に2度、学園の卒業生が世界を滅亡の危機から救つていた。

もちろん救世主だけじゃない、次代の英雄、時の権力者、後世に名を残す偉人の多くは皆この学園の卒業生であった。

『　　「求めよ、さらば」「えられん」
　　「尋ねよ。さらば見出さん」
　　「門を叩け、さらば開かれん」』

能力在る者には等しく機会が与えられる。

集え「聖救世主学園」に己の価値を知りたくば。
集え「聖救世主学園」に己の世界を知りたくば。
集え「聖救世主学園」に己の運命を知りたくば。

集え「聖救世主学園」に世界を滅亡の危機から救うために

「浄化」

サヤの力ある言葉に応え、半径約30レンクス（30メートル）の泉を囲つた魔方陣が一瞬淡く光つて消えると、不気味に赤く濁つていた泉が本来の透明な色に戻つた。

「おお！」と外野にいる人達から感嘆の声が上がる。

よし、とりあえずは成功。

「泉の祓いは終わりました。明日の朝もう一度穢れが無いか経過を確認して、大丈夫であれば祭りの準備を再開して下さい」

「ありがとうございます、ありがとうございます、本当に助かりました。ありがとうございます」

刻まれた顔の皺を深くして喜ぶ村長に、サヤも一先ずの仕事の完遂に笑みを浮かべる。

聖救世主学園の生徒であるサヤ・ヒューインは実技演習を兼ねた派遣救世主として今日この地の救済に来ていた。

実技単位とバイトを両立させるために。

「それと一つ注意事項を。泉の周りに布いた陣が安定するまで、半日はかかるので今夜は誰も泉に近づかないで下さいね」

小さな村の年に一度の豊穣祭。

今回学園にきた依頼は、祭りの前に起つた泉の濁りを取り除く事。御神体を守る泉の結界の綻びを修復することだつた。

「態々こんな田舎までメシア様に来ていただいて・・・」

「いえいえ、これも学園の仕事ですから」

何も世界を救うことばかりが救世主の仕事ではない。土地の浄化や精霊とのコンタクト、希少生物の保護など、実際は地味な作業の繰り返しの方が遥かに多いのだ。（賢者や勇者と呼ばれる本物の救世主が活躍するレベルの世界的危機などそう簡単に転がつていてたまるか）

学園で組み分けされている階級からいえば、サヤのいる位置は所詮

近所の便利屋さん的地位である。有りがたがつて拝まれてしまつ

グレード

と居心地が悪かつた。

「祭が近いせいで宿が混んでいてな・・・メシア様には悪いが、相

部屋で頼むわ。二階の西部屋奥だ」

髭面で愛嬌のある顔の宿屋の主人から合鍵を受け取り領く。

大きくもない村に宿屋は一つしかいらしく、年に一度の豊穣祭を祝うためにやつて来た人々や旅人、祭日当ての行商人でパンク寸前だった。

主人の話によると、去年村の豊穣祭に偶々参加したセントラル在住の女性が、祭りの帰りに買った『魔術鉄道横断宝くじ』で見事に一等賞金1千万ドラクマを当選させたとか。その話が本人の写真付で大陸新聞の一面にデカデカと載り、彼女と同じく御利益にあやからうとした人々が迂遠からも押しかけているらしい。

（だから村長もあんなに必死だったんだ・・・）

目立った産業や観光名所も無い村としては、新名所の誕生につなげるため今回の祭りをなんとしても成功させたいのだろう。サヤは何処も大変だなと思いながら、扉を開けた。

「・・・貴様アアーツ！よくも私の前にその顔を出せたな！」

ぱたん。

閉める。

「・・・」

カタ。

開ける。

・・でも！私は会えて嬉しいのです上

に
た
h

閉める

部屋の番号は合っている。
というか、合鍵で扉が開くのだから間違
いない。

(修羅場中一癇諺喧嘩)

合っていた金と銀。

二階の踊り場にダッシュで戻り、吹き抜けで繋がっている二階に大

戸一書六

無理無理無理無理無理力かり 部屋の交換を要する

部屋

全然大丈夫じゃなよ！相部屋（予定）の住人が問答無用で殺し合

「一ノ瀬」

おじさんのベットと一緒に・・

「変態は死ね！」

親父と同衾するくらいなら、火竜の巣のど真ん中でアイマスク装着

で寝る方が百倍もましだ

屋根付きの部屋を諦めて野宿をするか・・・

嫌だ。
断固拒否。

路銀節約のため、この村に着くまでに散々野宿をしてきた。いい加減に温かい布団の中で眠りたい。

むしろ布団の中で死ぬなら本望だ。

サヤは覚悟を決めると、音を立て無い様に割り当てられた部屋の中に滑り込んだ。

（うわっ、予想通り・・・いや、予想以上に酷い）

焦げた柱。三つある備え付けのベッドの内、一つは半壊。掛け布団に詰められたは綿は飛び出て散乱している。多分サイドボードであつた物は原型を留めていない。壁には極端に短い柄えの小刀が数本深々と刺さっていた。

「つ～～～、マリアンヌ！いい加減に刀の鎧になつたらどうだ！」

凛々しい言葉と共に刀と呼ばれる片刃の剣を鋭く振るう銀髪の少女。

「うふふ。カグヤちゃんは相変らず元気いっぱいですね」

踊る様に優雅な動作で刀の刃を神経白刃取りする金髪の少女。

カオスだ。

数多の犠牲を出し、二人の少女達の修羅場は佳境に入つていた。

無事な枕を胸元に手繰り寄せ、こそこそと物陰に隠れて静かに二人の少女を観察する。

今の位置から顔は窺えないものの、確かに声の質は若い。親父の情報通りなら多分私と同じ位の年齢だろう。

刀を振回し、着物という東の国特有の前合わせの民族衣装を着た銀髪少女が「カグヤ」で、体のラインに沿つた機能重視な軽装、やら喋り方が丁寧な金髪少女がどうやら「マリアンヌ」というらしい。

「カグヤ」と「マリアンヌ」
よし覚えた。

二人の過失で怪我を負つた場合、きちんと治療費を請求出来る様に

しつかり記憶に刻む。

「カグヤ」と「マリアンヌ」
なん?

特別珍しい名前でもないのに、私は妙に引っかかりを覚えた。

「カグヤとマリアンヌ」

二つの名前が揃つてることに意味があつたような……。

やだなあ、物忘れをするには若すぎでしょ自分。

「カグヤとマリアンヌ」そして「私」。とっても「デジャブを感じる」この光景。

……。

あれ?

ひょっとして

「カグヤとマリー?」

呴きはたいして大きな声でもなかつたはずなのに、瞬時に少女達が振り返つた。

「「サヤ(ちやん)ー?」」

(うわあーー)

間違いない。

サヤは教えてもない名を呼ばれ確信した。

金髪と銀髪の少女改め、美少女二人組は、九年前に分かれた幼馴染
『混ぜるな危険』コンビだった。

第一話～幼馴染の関係は～

横からカグヤ、サヤ、マリアンヌの順で並び、ぶらぶらと祭の準備で忙しい村を散策する。

衝撃の再会の後（自分たちの暴れっぷりを棚上げし）散らかつた部屋では、ゆっくり話も出来ないからと、怪しむ親父さんに多めにチップを渡して逃げ・・・ゲフンゲフン、部屋の掃除を頼んで出でた。

帰る頃には片付け終わって・・・いればいいなあ。

「えっと、六歳の時に分かれて以来だから、九年ぶりの再会だよね。元気にしてた？」

まあ、あれだけ暴れ回れるのだから十分元気だらうけど、一応。

「ああ。本当に・・・久しぶりだな」

「サヤちゃんもお元気そうで安心しました」

まつ、眩しい。

口元を僅かに上げる仕草が魅力的、シャープで美人系のカグヤ。ニッコリと、人受けが良い笑顔の可愛い系マリア。

同じ年で昔から素材が一級品だった幼馴染達は、誰もが振り返る美少女に成長していた。

「まさかサヤとこんな所で再開するとは思わなかつたぞ」

「わたくしも驚きました。まさかこんな村でサヤちゃんに会うなんて」

「あのねえ、一応グラナード村っていう立派な名前がついてるから

こんな所とか、こんな村とか、大概失礼な子達である。

成長したのは外見ばかりで、中身は唯我独尊のままなのか。

「グラナード？ そんな名前だつたのか」

「“富める村”って意味らしいけど・・・」

「明らかに名前負けしてますね」

「・・・」

笑顔で毒を吐くマリアンヌは健在だつた。

「そ、それでカグヤとマリーは一体何をしにきたの？」

マリーはともかく、村の名前さえ知らなかつたカグヤが祭り用當てでグラナードを訪れたとは思えない。

「私は探しものをしている途中でこの村に寄つただけだ」

「わたくしは観光で」

やつぱり。

サヤが思つた通り、二人の目的は別々だつた。

「それじゃあ、一人共村の中で偶然再会したんだ」

「偶然じゃありません！ これはきっと運命の再会です！」

「氣色悪いことを言うな！ 偶然に決まつてはいるだろう！・・・」

太陽スマイルと渋^{しづ}い顔。

うん。その反応で大体分かつた。宿屋で再会して、即^{そく}ガチンコバトルになつたと。そして私がそのバトル中に合流したと。

「そう言つサヤちゃんは、聖救世主学園のお仕事でこの村に来たの
でしょ？」

「へ？」

マリアンヌの鋭い指摘に思わず出た間抜け声。

彼女の言い方は疑問^{クエスチョン}じゃなくて断定だつた。

「正式には単位習得と実益を兼ねた実技実習でなんだけど、なんで
分かつたの？」

「その制服を着ていればわかる」

眉を寄せ、カグヤがサヤの着てゐる制服の紋章を一瞥した。
成る程。 そいつれば着替えていなかつたつけ。

「勿論紋章も有名ですけど、聖救世主学園の制服はデザインが可愛いい」とでも有名ですから

「優れているのは、アザインだけじゃないけどね」

サヤが現在着ている制服は、学園が生徒に着用を義務付けていた最もスタンダードな型だ。

マリアンヌが言うように、深いオリーブグリーン色を基調とした制服は、デザイン性オリティーの高さから世代を問わず幅広く評価され、一般の人達の認知度が非常に高い。

が、見た目が可愛いだけで終わらないのが聖救世主学園らしいところで。

使われている素材は対衝撃、対魔法、耐久性等に優れた一級品。救世主候補生達には備品として普通に学園から支給されるが、同じ性能のローブを買おうと思えば、田舎に家付きの土地アイテムが買えてしまうくらいの大金を積まないと手に入らないほど高価な服として、冒険者の間では有名だった。

「似合つてこの物語」

「そつかな、私が着るには可愛すぎやしない？」

褒められるのは嬉しいけれど、平凡な私が着るよりマリアンヌの方
が絶対に似合うと思つ。

「貴様は私に話かけるな
がイヤをやんもそ、思しますよな」

マリアンヌが笑顔でふつた話題を、真顔でばさりとカグヤが切つて捨てる。

「うう、カグヤちゃんが冷たい。わたくしだつて、カグヤちゃんや
サヤちゃんと仲良くお話しinしたいのに」

カグヤへへへへへへへへへマコアソヌ。

「た、大変です、サヤちゃん！カグヤちゃんはツンデレのはずなのに
相変わらず二人の温度差も健在だった

に、『テレの要素が欠片も見当たりません。カグヤちゃんの『テレは一体何処に！？』

突然大人しく隣を歩いていたはずのマリアンヌに左腕を掴まれ、がくがくと揺さぶられる。

「うわっ！ ちょっと、ま、マリー、引っ張らないで、離れて・・・歩きにくいから！」

豊かに育ちまくった胸をぎゅうぎゅうと押し付けてくるのは私への挑戦か！？

ちくしょう！ 受けて立つぞ、女の胸は大きさじゃない、形だ！

「貴様！ サヤから離れる！ 下品な胸をサヤに押し付けるなっ！」

「いっ！」

今度は右腕をカグヤに力いっぱい引っ張られる。

あ、カグヤはペッタンコだ。

「嫌です。カグヤちゃんがわたくしに優しくしてくれるなら離れます」

「虫唾が走る！」

「痛たたた！ 千切れるから！ 左右から引っ張らないで！ 腕千切れちやうからっ！」

肩の骨がミシミシと鳴る音が・・・！

「サヤが痛がつていいだろ？ とつと離したらどうだ」

「代わりにカグヤちゃんに抱きついてもいいなら直ぐに離れますが」

「死ね！」

サヤの腕が千切れる前に、カグヤの我慢に限界がきた。

「貴様を切り捨てサヤを開放する」

カグヤが素早く刀の柄に手をかけた。

て、『冗談でしょう！？』

「ストップ！ ストップ！ 宿を出る時約束したよね！ 喧嘩は無し。やるなら私の居ない所でやつてつて」

「安心しろサヤ。一瞬でこの女を始末する」

「安心出来るか！」

「助けてサヤちゃん」

「マリーは私を盾にすんな！」

サヤの我慢の限界もここまでだった。

「いい加減にしなさいっ！…！」

「ゴン。ゴン。

と、一度鈍い音が平和なグラナードの村に響きわたった。

「まつたく、小さい頃から全然変わつてないんだから・・・」

九年たつても、少しも変わっていない幼馴染達に喜べばいいのか、悲しめばいいのか・・・。

サヤはブツブツと呟きながら、広場の屋台で売られていた饅頭片手に一人散歩の続きをする。

ちなみにカグヤとマリアンヌは拳骨をお見舞いした後、正座をいつけ道の端に放置してきた。

サヤは理由を知らないが、昔からカグヤはマリアンヌを毛嫌いしていた。

逆にマリアンヌはカグヤが大好きで、嫌がるカグヤの後を追いかけ回していたのだが、それが益々カグヤのマリアンヌ嫌いに拍車をかけていると、どうして本人は気が付かないのか。

「カグヤはパーソナルスペースが目茶苦茶狭いんだから、マリーも

必要以上に構わなければいいのに

振り返り、誰も居ない空間を睨みつければ「ばれていましたか」と、ひょっこり建物の影から顔を出すマリアンヌ。

「正座はどうしたの？」

「後でまとめてします」

この要領差も不仲の原因の一つかも・・・

「あ、カグヤちゃんはきちんと正座しますよ」

「知ってる。カグヤは根が真面目だから」

「ん~、それは違うと思います」

「？」

「カグヤちゃんは確かに真面目ですが、無駄が嫌いです。誰も見ていないのに真面目に正座を続けるのは、それがサヤちゃんの云い付けだからですよ」

「・・・」

「サヤちゃんの言葉は、昔からカグヤちゃんの絶対だから」

「・・・本当に一人共九年前から全然変わつてないね」

徹底的にマリアンヌを嫌うカグヤは、何故か始めからサヤの事を認めていた。

何か問題を起こした時、周りの大人達がいくら諫めても全く話しきを聞こうとしなかつたカグヤが、何故がサヤの一言で大人しくなる。まるで神の啓示の様に。

「たつた九年じゃ何も変わりませんよ」

「私達三人が一緒に過ごした時間よりずっと長いけど

「ふふ」

「何かおかしなこと言つた?」

くすくすと急に笑いだしたマリアンヌに訝しむ。

「いいえ。ただ、サヤちゃんも何も変わっていないと思いまして」

「・・・・・・」

安心しましたと笑うマリアンヌ。

カグヤと一緒にない時のマリアンヌはビビりも苦手だ。キャラが違うすぎる。

「前から聞いづと思つてたんだけれど、マリーって私のこと嫌いなの？」

「何故？わたくしがサヤちゃんを嫌う理由なんてないですよ」

「でも好きでもない？」

「惜しい。不正解です」

「じゃあ正解は？」

「正解は・・・・・時間切れですね」

マリアンヌがサヤの背後を指差す。振り返ると奥の方から殺氣交じりに土埃を上げて走つて来る人影が一つ見えた。多分カグヤだろう。

「残念」

カグヤと合流したらまた幼馴染のマリアンヌに戻るのだろう。

「残念ですか？本当に？」

隣に並んだマリアンヌが未だ黒い点にしか見えない人影を、眩しい光でも見るかのように見つめる。

「うん。残念」

「サヤちゃんはカグヤちゃんと違つて、嘘吐きですね」

「そうだよ。マリーと同じで嘘吐きなの」

本當はホツとしたなんて言わない。

自分でマリアンヌの中に踏み込んでおいて、尻込みしたなんて絶対に教えない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778x/>

サヤとカグヤとマリアンヌ

2011年10月10日01時53分発行